



Title: 書きたいことが多すぎて

当コラムは原則第2・第4金曜日が掲載日。大体は1週おきなのですが、たまに第5金曜日があると今回のように間隔が3週間空くことになります。この間、大型連休があり熊本・大分では地震が続き、米大統領予備選挙も北朝鮮情勢も気になるし、最頂のサッカーチームは勝率を落とすし、新聞の切り抜きは溜まり、図書館でも新規イベントがあり、出張もあり仕事の締切りにも追われ、とまあテーマというかトピックにはまったく困らない状況です。

で、いつものように締切りが迫ってからパソコンの画面をにらんでいます。いつもなら頭の中では取り上げるトピックが既に決まっていて、あとは何を書くかでなくどう書くかなのですが、今回はどうも勝手に違います。何を書くかがまとまらないのです、書きたいことが多すぎて。

いつまでも迷っているわけにはいかないので、掟破りの感もありますが、順不同でほとんど材料だけ並べることにします。

❖ 高島野十郎の図録を入手

孤絶とも言うべき生涯を送った画家・高島野十郎（やじゅうろう）。没後40周年の記念展が現在は目黒区美術館で開催されています（6月5日まで）。その図録が書店ルートで発売されており、弘前市のK書店でついに見つけました。いつか本物を見たいと思わせる図録です。

❖ 加賀公さんのコラムに

コーヒー店KOWのマスター加賀公さんによる本紙連載「遊々楽々」。5月1日の同コラムでは、音楽の媒体の変遷にからめてのこだわりが披瀝されていました。私も、帰郷前にいた某レコード会社が、ちょうどCDの開発時期でした。社内のデモで初めて見たCDの虹色の輝きや、洗濯機程もあるプレーヤーのプロトタイプを忘れません。あの頃、音楽がパッケージ商品でなくなる可能性なんて想像もしていませんでした。

❖ 4月下旬の秋田市で

2度秋田市へ行く機会がありました。県立図書館の展示室では、県立博物館の出張展示「昭和40・50年代を行く」が開催中。初代ウォークマンが懐かしい。昭和54年で3万3千円もしたのに、なぜ若者があんなに飛びついたのか。ソニーが輝いていた時代でした。

菅江真澄の墓にも初めて行きました。高清水の岡からは日本海がよく見えるんですね。真澄に望郷の思いはあったのか、謎の多い前半生について明らかになる日は来るのか、といろいろ考えました。今は飲めない高清水の泉のそばで、雉のつがいのがんびり歩いていました。閉館時間が早くて行けずにいた県立博物館にも、ついに行くことができました。想像以上に充実した展示、古本まで置いているショップも楽しい。いつかMLA（博物館・図書館・公文書館）連携にぜひとも取り組みたいものです。

❖一ノ関圭が、きてる

矢継ぎ早に発表された第 20 回手塚治虫文化賞のマンガ大賞と第 45 回日本漫画家協会賞のコミック大賞受賞。あまりの寡作ゆえに「伝説の漫画家」「幻の漫画家」と称される一ノ関圭の『鼻紙写楽』（小学館、2015年）です。とにかく上手いし、深い。漫画もいいですが、中央図書館が所蔵する一ノ関さんの著書でぜひ読んで欲しいのは、『江戸のあかり』（岩波書店、1990年）、『絵本夢の江戸歌舞伎』（同、2001年）という2冊の絵本。その絵には圧倒されます。

❖二人の「とらじろう」

吉田松陰は通称が寅次郎。また、毛馬内出身の内藤湖南の名も虎次郎で、読みは同じです。湖南の名付けについては、父調一（号は十湾）が熱烈な吉田松陰の信奉者だったからと、いろんな本に書かれています。ただ、その情報が何から来ているか明示した文献を、今のところ確認できていません。湖南全集をチラ読みしても出てこなかったような。このこと、いま個人的に気になっていることのかなり上位にあります。

なぜ気になるかという、狩野亨吉の父狩野良知の著した『三策』が松下村（邨）塾から発行されていること（松陰はずかり知らぬことだったようですが）、内藤湖南を京都大学に招聘したのが狩野亨吉であることに加え、湖南＝虎次郎の名付けが松陰にちなんだものであれば、大館（図書館）から見て三者の円環が成立するではありませんか。（陽）